

金在南

KIM JENAM

鳳仙花のうた

HOSENKA



鳳仙花のうた

HOSENKA

キム・ジェナム
KIM JENAM

金在南

河出書房新社

鳳仙花のうた

一九九二年十一月十日 初版印刷
一九九二年十一月十五日 初版発行

著者 金 在南

装丁 菊地信義

発行者 清水 勝

発行所 株式会社河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二

営業〇三―三四〇四―一二〇一

電話 編集〇三―三四〇四―八六一一

振替口座（東京）〇―一〇八〇二

印刷 暁印刷株式会社

製本 小高製本工業株式会社

落丁・乱丁本はお取替えいたします

定価はカバー・帯に表示してあります

©1992 Printed in Japan

ISBN4-309-00800-3

金 在南（本名・姜 得遠）

一九三二年、韓国全羅南道木浦市生れ。五二年、渡日。早稲田大学第一文学部露文科を卒業し、大阪朝鮮高校、のち大阪外国語大学で教鞭をとる。また「朝鮮新報」に長篇小説「つつじの花咲くころ」や短篇小説数篇を朝鮮語で発表。その後、在日団体「総聯」を離れ、八二年、朝鮮籍から韓国籍に移り、日本語で創作をはじめ。八九年、季刊誌「民衆」六号に長篇「暗渠の中から」、七号に「くらやみの夕顔」を発表。九〇年、「関西文学」九月号の「戸狩峠」で第22回関西文学選奨を受賞する。

鳳仙花のうた

コップニと出会ったのは、一九四三年、十七歳のときだった。

当時私は、韓国最南西の港町、木浦市に住んでいた。学校が休みになると私は、町から七十キロ離れた、城内ソシエとよばれる海沿いの田舎へよく行つた。ここで父が農業を営み、広い屋敷があつたからだ。

母は、子どもたちの教育のためには町へ出なければならぬということ、私が生まれてまもなく、四人の子どもを引き連れ村を出たそうである。それで父は、日常生活が不如意になつて、それから二年後、もう一人の妻を娶とつた。つまり妾めかけである。今でこそ妾をとると社会のヒンシュクを買うのだが、当時は、生活に余裕のある男には黙認されるような時代であつた。

小学校のいつの頃からか、私はひとりよくこの村へ行つたが、とりわけ、ひと月以上もある夏休みには欠かすことがなかつた。夏には、ここでいろいろな愉しみがあつたからだ。海辺であるから、てがるに泳ぎはできるし、釣りもできる。畑には水瓜やマクワウリがごろごろがついて、

好きなだけとって食べることができる。それに、何かとこうるさく口出しをする母のもとと違い、自由気ままに、のびのびと羽をのぼすことができる。それにもう一つ——手狭な住居、せせこましい灰褐色の町のなかと違って、すぐ近くに海あり山あり溪流もある風光明媚なこの地方は、幼いときから私をすっかり魅了していたものだ。

父はもともとが寡黙で、なにごとにつけ干渉がましいことは一切いわない——どちらかというと、まったく放任主義の男であった。といっても、別に私に冷淡であったわけではなく、正妻の四人の子どものうち、たったひとりの息子で末っ子の私には、とりわけ寛大で、やさしく、むしろいち目置いてあるふしさえみられた。とくに、町に一つしかない、朝鮮人のなかなか入学できぬ日本人中学に合格してからというもの、私をひとりのおとなとして遇してくれたものだ。いや、五年に上がつたこの頃には、家を継がなければならない総領として意識していたのだろう、少年の私に、時々相談ごとさえ持ちかけてきたほどだ。

もともと、当時の朝鮮人（旧制）中学生といえ、今とちがつて、肉体的にも精神的にも遅しく、高学年生ともなれば、おとなたちは概して、私たちを確固たる社会人として遇する風潮があったのだ。

さて、城内へは海路、陸路、どちらからも行けたが、そのどちらも距離はほぼ同じく、孤を描くように遠く迂回していかねばならなかった。しかし陸路をとる場合は、バスは面（地方行政単位のひとつ。郡・面・里・村とつづく）の大邑（むら）までで、そこから村まで二時間余も歩かねばならないのに、海からの場合は、汽船で岬の船着場まで一時間半、そこから徒歩で一時間ぐらいでいけるため、私はいつも楽な海路だけを利用していた。

その日、七月二十二日のことは、今でもはっきりと憶えている。終業式が二十一日で、そのあくる日に田舎へ向かったからだ。

よく晴れわたった、本当に夏らしき日であった。「夏らしき」といういい方はおかしいけれども、夏にはいつて久しいのに、それまでが夏らしからぬ日々だったからだ。その年はたしか、例年より遅れて始まった梅雨が七月の半ばまで続き、しかも梅雨が明けてからも天候はいっこうにすつきりせず、うす墨色の雲塊がたえず低迷して、陰気な日々が続いていた。それで終業日が近づくと私はやきもきしていたけれど、田舎へ発つ日になって一転、夏の日和となった。

その日、空は朝から青く澄みわたり、太陽は明るく照り輝いた。といつても具合のよいことに、昼までは涼しげな風が吹き流れ、それはちょうど初夏のような爽やかさであった。

岬において山また山の、人けのない小道を歩くあいだ、私はずつと浮かれていた。口笛を吹いたり、歌をうたったり……。いや、汽船の中にいるときだつてそうだった。汽船に乗り込んで一時間半ものあいだ、私は船室には一度たりともめぐり込んだことがない。陽の照りつける、覆いもない甲板に立つて、通り過ぎる多島^{グト}海の島々を眺めながらずつと何かを口ずさんでいたものだ。

私がこの日浮き浮きしていたのは、あながち天氣のせいだけではない。また、町での苦しい学校生活から解き放たれ、これからのびのびとした田園生活にはいれるという喜びからだだけでもないであらう。

いま思うに、あのとき、やつと私の肉体の中にも、芽吹く春のように、なにかめざめてくるものがあつたからではないだろうか。というのは、いまおぼろげに憶いだすことだが、あのとき私は、なにかを期待する気持ち、なにかを待ちのぞむ気持ちで、たえず血潮が立ち騒いでいたからだ。も

ちろん、それが何であるのか、はつきりつかみとれるものではなかったが——ひどく切なく、そのくせなんといふようなない、甘い、鬱勃^{うづぼつ}と湧きたつ疼^{うず}きが、からだの中をかけめぐっていたのだ。

数日前まで雨にたたられた野山は、まだその面影をとどめていた。樹木や草花の葉むらは、しつとりした艶^{つや}を放ち、そよ吹く風に涼しげな音をたてていた。雨水をいっぱい張った青田は、山や丘や樹木の姿をくつきりと映しだし、ざらざらと湿りけを帯びて膨らんだこの地方独特の赭土^{しやど}は、編上靴の底をかるく吸い込んでこちよかった。清澄な空気の中にむっとする草いきれ、土いきれ、それに時折り漂^ういくるオゾンの入り混じった松脂^{まつぎ}の香も、浮きたつ私の心をいつそう弾ませた。

村への入口、「井戸^{セム} 上丘^{ウオンドク}」(井戸の上方にある丘、ということから名づけられた)とよばれる丘にたどり着いたとき、私はいつものようにしばらく佇んだ。そしてまず、眼下の村を見下ろし、その先の、夏の陽差しを浴びてきらきら光る入江や、それにつづく多島海の無数の島々や、左手の、海沿いになだらかに起伏する緑の丘陵を見はるかした。それから目を転じて、右手に広がる広々とした田畑、その平野を取り囲んで遙か遠く、かすむまで折り重なる緑の山並みを、とりどりに見わたした。いつ眺めても飽きることはない素晴らしい眺望であった。

私はいく度も深く息を吸い込みながら、ひとりつぶやいた。

よし、これから頑張るぞ！……

翌日からの充実した日々を想うと、ふるいたつような歓びが身内いっぱいに広がった。四十日とかい夏休みのあいだ、ここからだを鍛え字力をうんとつけよう、と私はずっと前からプランを練ってきたのだ。

からだを鍛えるには、事欠かないところだ。家のすぐ裏の海へ行けばいくらでも泳げるし、夜明

けの山野のランニングもよい。さらに、その気さえあれば、汗を流しての労働だつてある。そして日中は、風のよく通る涼しい大庁デチヨン（広い板の間、縁側）で机に向かう。この夏重点的に実力をつけようとする学科の参考書が、背中の鞆にはぎつしり詰まっていた。

私は夏草の生い繁る細い坂道を下つていった。しばらくいくと村の共同井戸があり、そのそばを通つて、両側に竹林のつづく小道をたどると村へはいる。

真昼のこの時間帯には、井戸端に人けはなく、ひっそりしていることが多かった。たまに人がいても、二、三人——それも足腰が弱つて野良に出られぬ老婆か、幼女たちばかりだ。農婦おんなたちが集まるのは、暁方か夕餉ゆうけの用意をするたそがれどきと決まっている。

だが下りていくにつれ、かなり大勢の農婦の賑やかな話し声が、かすかに聞こえてくるではないか。

私は数隣立ちすくんだ。農婦たちがたむろしているところではいつも、私は引きとめられて一人ひとりに挨拶を交わさねばならなかったからだ。私が顔を知らぬ村人でも、私が誰の息子か知つていて、誰その息子でねえのかえ、とよく声をかけてくる。かけられると、そのまま素通りすることはできないのだ。

父はこの地方の小地主で、いくばくかの土地を近隣の人たちに貸しつけていた。また広大な自作の土地も家族や住込みの作男たちだけでは手に負えず、農夫たちを雇つて使つていた。が、他の地主よりずっといい報酬を与えていたので人気があり、その人柄から人望も厚かった。それでかどうか、その息子である私を、村人たちは可愛がつて大事にしてくれるようなところがあった。

当時、私はやや内気で、馴染まぬ村の農婦たちと話を交わすのが苦手だった。それで挨拶が済む

と、はやばやとその場を離れようとするのだが、相手は、昔なじみだった母や、それから三人の姉のことで聞きただし、さらにはくどくどと町の様子なども聞きたがる。その間、農婦たちは、私を、頭のとっぺんから爪先まで、ためつすがめつ眺める。きつと田舎では見慣れぬ学生帽や、カーキ色の学生服、革の編上靴などが珍しいのだろう。それから長々と、村にいたときの母はどうであったとか、嫁いだ二人の姉もここでは小さな子どもであったのに……とか、私をとどめて尽きることのないお喋りをつづけるのだった。要するに、彼女たちは変化のない田舎の日々に飽きあきし、退屈しきっているのだ。だが、話の相手にされるこちらのほうは、迷惑千万このうえもない。

「こいつはついてねえ！」

私は呟いて、戻りかけた。だが、今さら井戸上丘に立ち戻って、かなり遠回りの道をとることも馬鹿らしくなった。私は息を深く吸い込むと、そのまま歩を進めていった。

案の定、井戸からすこし離れた石畳の洗い場に、十数人の農婦が群がっていた。

この真つ昼間に、彼女たちが井戸端にたむろしているのも異常であったが、また、「共同の仕事」をやっていることもただならぬことであった。夕方など、ふつうは、水を汲み、野菜を洗い、雑穀をとぎ（米をとぐのは滅多に見たことがない。米飯を食べられるのは村ではごく僅かだった）、または洗濯をしたり——それぞればらばらの仕事をやっていたものだが、このときは、皆がみな、同じ仕事——大量のおおもの、大量の糯米もちこめを分担して共同の洗い仕事に精をだしているのだった。

糯米！……それを目にした瞬間、私は、なにかあるんだな、ととつさにひらめくものがあつた。どこか、金持ちの家の慶事キョウシヤかな？ それとも祭祀ジセイヤ（法事）かな？……

ちらと見ただけで私の知っている顔の何人かが交じっていた。その中に、村いちばんの饒舌家と

いわれるクモシ權英オモニ（誰その母、というとき、その息子か娘の名前を、前につける）が目端にと
まつて、私は、やれやれ、と溜息をついた。

「あーれ、容太コンテでねえか！……」

權英オモニが、下りてくる私をいち早く見つけ、甲高い声を張りあげた。皆が顔を挙げ一斉にふり返る。顔見知りの農婦たちがつぎつぎと立ちあがり、笑みをたたえて声をかけてきた。

「すっかりおとなになってしまつてえ……」

權英オモニは、私のほうへ歩みよりながら、私のからだをしげしげと眺めまわした。

たしか今年の春、いやその前の冬だつて、はじめて逢つたとき彼女はそういつていた。そして大きな目をますます大きく見ひらいて、いかにも驚いたというふうな表情を見せたものだつた。たしかに、私は最近、自分でも分かるほど背丈がのびていた。中学入学と同時に私は籠球部にはいつたのだが、それでかどうか、背はぐんぐんとのびて、しかも横のほうにも逞しく広がつていつた。

あけつびろげな性格はいいとしても、權英オモニが、行き会ふと必ず——それが村のなかであるうが細いあぜ道であらうが——引きとめて、のべつまくなしにお喋りをしかけてくるのにはいつも閉口したものだ。

それでこのときは、挨拶もそこそこに、そそくさと井戸のほうへ近づいていつた。

一時間も歩いて私は喉が渴いていた。また、冬休みのときは別として、いつも村に來ると入口のこの井戸で喉をうるおすのが習いとなつていたのだ。家の井戸水もわるくないが、こつちのほうはるかに美味しいと思つていたからだ。

杓すく型の、四角に囲つた井戸は、底は浅いがかなり広い。いつもそうだが水は、囲い石から溢れて

微かな音をたてて流れていた。その水がキラキラと光を弾いて、見るからに冷たそうに見える。

囲い石の脇に置かれたバカチ（ひょうたんを二つ割りにして水汲みに使う）を手にとると、私は水を掬ってゆつくりと口に含んでいった。

冷たい水はいつもよりずっと美味しく思われた。鉱物質の微妙な臭いは相変わらずだが、喉もとを通る瞬間のさらっとした、あの透明な味わいは今夏にかぎって殊更で、私は、おや？ と胸の中で呟いたほどだった。その美味しさに引きずられ、私は飲み干したバカチをもう一度、井戸にさし入れた。

とそのとき、井戸上丘とはちょうど直角の方角の細い坂道から、かすかな足音が聞こえてきた。私はなにげなく顔をふり向けて、はっと息をつめた。かつて見たことのない美しい少女が、目にはいったからだ。遠目にも少女の美しさははつきりとわかった。

少女は小脇に水甕を抱えていた。そのそばを、幼なじみの槿英（きんえい）がやはり水甕を頭にのせて、歩いてくる。だがもちろん、私の目は槿英ではなく、その見知らぬ少女へ、釘づけにされた。二人は石ころの多い足もとを氣遣って下を向いて歩き、私には氣付いていなかった。

私の心臓はにわかに躍りはじめた。

少女は顔立ちも美しいが、すらりと伸びたその肢体が、いつそう私の目を捉えた。それに、そのからだを包む薄桃色（うすももいろ）の上衣、浅黄（あきぎ）いろの細長い裳（チヌ）が、上品な面差しとよく調和している。彼女を目にした瞬間、その周辺がぱっと華やいで見えたほどだった。

どこから来た娘なんだろう……。親戚をたよって遊びに来たのかな？ いや、ひよっとすると、村に引越して来たのかもしれない……。

だが、ある考えが——最近、村に嫁入りしてきた女かもしれない、というひらめきが、私をやや失望させた。

少女は、遠目に見たときは、私と同じか、一つぐらい齡下に見えたが、近づくにつれて逆に、一つか二つ上に見えてきたのだ。

でも、ひよっとしたら……と私は思いなおした。少女が、未婚の権英と歩いていることや、その顔にどこことなくあどけなさが残っていたからだ。

二人はすぐ近くに来るまで、私には気付かなかった。そして二人のうち、最初に気付いたのは、その娘だった。

彼女も私を見つけると、はっとしたように立ちどまり、大きく目を見ひらいた。張りのある、それでいて涼しげな大きい瞳が、私を見つめ、それからするとまぶたをおろしてまばたいた。少女も、見慣れぬ私に、いくぶん関心をもったようだ。老若男女誰彼なしに、白木綿の韓服ハルボクだけ着用している村で、学生服を着込んだ私は、それだけで彼女の目を惹くにはちがひなかった。だが彼女はすぐ、私から目をそらしてまた歩を運んできた。そのときその顔には、どこかつんととりすましたようなところがあった。

このときにはすでに権英も私に気付いて、駆け寄っていた。

「容太でねえか！」

権英は男みtainな頓狂な声をあげた。彼女は井戸端にいそいで甕を下ろすと、「いつ来たん？」と鼻にかかった、甘えた声を出した。

「見りゃわかるだろう？……いま来たところだよ」

衆目のなかで気恥ずかしく、私はややぶつきら棒に応えた。

権英も、母親と同じくあけつひろげで、物怖じしない男勝りの少女だった。村の女の子たちが、長ずるに従って異性の少年に羞恥の念をもち、なかなか近づこうとしないのに、彼女だけはいまだに誰彼となく気やすく言葉をかけ、ときには冗談口もとばし、からかったりするほどのお転婆ぶりだった。とりわけ私に対しては、私が彼女の兄、権哲と村に来るたび親しく付きあつてきたためか、身内同様の心やすさを覚えていたのだろう。だが彼女は、もう私と同じ十七歳になっている。男とちがつて、女は十六にもなるとこの村ではもう適齢期にはいつているのだ。農村では、町とちがつてまだ早婚の遺風が残っていた。

私も村に来ると、日がたつにつれて退屈になる、変化のない田園生活のなかで、いつてみれば心やすくぐべり合える権英は、異性というより友達のような気持ちだった。しかし、ここ一年、やわらかく肉づき、女っぽくなってきた彼女に、内心少しずつ距離を置かざるをえなくなっていた。しかも今は、大勢の村人の視線を浴びているときではないか。いやがおうでも突慥貪にならざるをえなかった。

「こんども早く戻るの？」権英が訊いた。

「わからん……」

いつもとは違う私のよそよそしさに、権英はやや訝しげな顔だった。

「こんどは長くいてよ。夏休みいっぱい……ね？」

去年の夏だけは、籠球部の合宿練習があつて、私は半月ほど村を引き揚げていた。それで彼女は、今夏もそうではないのかと淋しがっているようだった。

照れかくしに水ばかり飲みつづけていた私は、権英の話しかけには上の空で、井戸端にかがんで水を汲みはじめた少女の横顔を、ちらちらと盗みみた。

権英オモニの声がすぐうしろから降りかかってきた。

「容太よう、南仙ねえさんから、おらになにか言伝てはなかったかね……」
南仙とは、私の母の名である。

「ええ、別に……」

私はふり向きもせず、答えた。とそのとき、権英が私の腰のあたりを思いっきりつねった。私は思わず、「いてて」と悲鳴をあげた。

洗い場のほうからどつと笑いがあがった。自分の顔が一瞬のうちに火照^{ほて}ってくるのがわかる。私は、顔を隠すように帽子の庇^{ひさし}をぐいとおろした。

「コップニばっかし見てえ!……」

権英が拗^すねた声を出した。私は思わず権英をふり向いた。細い目尻をつりあげて私を睨^{にら}んでいた。だが、その目つきは一種の甘えなのか、それともなじる仕草なのか、見当がつかなかった。

いつからこんなことをいうようになったのだろう……。今までは子ども同士の付きあいだったのに。彼女がすでに一人前の成長した娘になっていることを、私は思いしらされた。

しかし、そのような思いはすぐに消えさった。彼女が口にした「コップニ」という名前に、私は気を奪われたからだ。

コップニ、コップニ……と私は口のなかで呟^いいてみた。いい名前だ、と思った（コップニ、の「コッ」は花の謂^いで、「プニ」は通称か愛称につける助詞——このことはずっとあとになってわかつ

た)。

だが、名前としては不自然だ。愛称だろうか？……。私は、その珍しい名前や、少女の横顔の美しさに、またもや氣を奪われて、いつしか大胆にも周囲の笑いやさざめきをも氣にとめなくなっていた。

だが洗い場のほうから、一人の老婆が冷やかしの言葉を投げかけてきたときは、さすがにからだが強ばらせずにはいられなかった。

「權英、いつ容太のお嫁さんになるだかねえ！……」

「イイダ！……」

權英が長いべロを出し、老婆に目を剝いた。

「耄碌婆さん、大勢のまえでなにいつてるだよ。恥ずかしいでねえかよう」

「恥ずかしいようにも見えねえだがなあ」

老婆は切り返すと、前歯の四、五本欠けた黒い口を開けて、イツヒヒと笑った。また、どつと笑いが湧き起こった。さすがに權英も顔を赤らめ、老婆を睨んだ。が、すぐ、皆に迎合するように、えへへと笑いだしてしまった。

「婆さん、冗談にもそんなこといつちや駄目だべな」

權英オモニがたしなめた。そして、しんみりとした声で呟くようにいった。

「容太は、かりにも地主の息子でねえかよう……。どだい身分がちがうだべよ」

コップニは自分が冷やかされているわけでもないのに、なぜか顔をほんのり染めあげ、恥ずかしげに俯いていた。それでも水を汲みながらときどき、私のほうへちらちらと目を這わせてくる。そ